

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

The Dickens Fellowship of Japan

平成29年度秋季総会 プログラム

Annual General Meeting 2017 — Programme

日時：2016年10月7日（土） Date: 7 October 2017

会場：東京大学 駒場Iキャンパス 18号館1階 18号館ホール（東京都目黒区駒場3-8-1）

Venue: Bldg. 18 Hall, 1st Floor, Bldg. 18, Komaba I Campus, The University of Tokyo, 3-8-1
Komaba, Meguro-ku, Tokyo

理事会 Board of Trustees Meeting (13:00 – 13:30) 18号館4階 コラボレーションルーム4

総会 Annual General Meeting (13:45 – 14:15)

18号館1階 18号館ホール

(Bldg. 18 Hall, 1st Floor, Bldg. 18)

開会の辞・議事：佐々木 徹（ディケンズ・フェロウシップ日本支部長）Toru SASAKI

(President, The Dickens Fellowship of Japan)

第1部 研究発表 Short Paper Session (14:20 – 15:00)

司会：新井 潤美（上智大学）Megumi ARAI (Sophia University)

川崎 明子（駒澤大学）Akiko KAWASAKI (Komazawa University)

「『二都物語』における気絶——死の共有」

Sharing Death: Fainting in *A Tale of Two Cities*

第2部 シンポジウム Symposium (15:15 – 17:45)

「ディケンズとギッシング——隠れた類似点と相違点」

Dickens and Gissing: Subterranean Similarities and Differences

司会・講師：松岡 光治（名古屋大学）Mitsuharu MATSUOKA (Nagoya University)

講師：小宮 彩加（明治大学）Ayaka KOMIYA (Meiji University)

講師：玉井 史絵（同志社大学）Fumie TAMAI (Doshisha University)

講師：金山 亮太（立命館大学）Ryota KANAYAMA (Ritsumeikan University)

講師：三宅 敦子（西南学院大学）Atsuko MIYAKE (Seinan Gakuin University)

懇親会 (18:00 – 20:00) Convivial Party

会場：ルヴェソンヴェール駒場（東京大学駒場ファカルティハウス1階）

会費：一般 7,000円 学生 3,000円

第1部 研究発表 Paper

『二都物語』における気絶——死の共有

駒澤大学准教授 川崎 明子

『二都物語』では多くの人々が死ぬが、生き残る主要人物たちも、字義的・比喩的気絶を通して死を共有する。本発表では、登場人物がいかに関与するか、死者がいかに関与するかを明らかにしたい。フランス革命自体に死と再生という概念が伴う中、最も大規模な死と蘇りを達成するのがシドニーである。ルーシーは何度も気絶しこの型を反復する。マネット医師は気絶と睡眠に喩えられる精神状態に陥っている。チャールズは薬の作用により気を失うことで一命を取り留める。そして死者は様々な形で、生きる者の生に貢献する。ジェリーが盗む死体は医学に貢献する。覚醒時のマネット医師は負傷者を治療する。シドニーはダーネイ家の未来を確保する。出版当時の読者にとって過去であるフランス革命における死と再生のあり方を考察することで、当作品における時間の概念についても考えたい。

第2部 シンポジウム Symposium

ディケンズとギッシング——隠れた類似点と相違点

C. K. Shorter は、George Gissing, *Charles Dickens: A Critical Study* (1898) の書評で、「ディケンズを好意的に批評する仕事はギッシング氏に与えられたのは面白い皮肉だ」と述べている。前者は貧困を実際以上に明るく、後者は実際より暗く描いているからである。楽観主義と悲観主義という大まかな作風の違いはあるにせよ、ギッシングの陰鬱な小説にはディケンズ的な笑いやユーモアが見られるし、ディケンズがギッシング並みの重苦しい深刻なテーマで書いた作品も少なくない。また、登場人物、プロット、技法、社会問題の扱い方、ロンドンの情景描写などに関して、これまで両作家の類似点がたびたび指摘されてきた。しかし、そうした類似点の背後には二人が持って生まれた気質の影響、そしてヴィクトリア朝前半と後半の時代精神や社会風潮の影響を受けた相違点も見出せる。本シンポジウムでは、このような「隠れた類似点と相違点」に注目しながら、ディケンズとギッシングの作品について5つの観点から比較検討してみたい。

司会・講師：名古屋大学教授 松岡 光治

「近代都市生活者の自己否定、自己疎外、自己欺瞞」

現世での労働で神の恩寵にあずかるというプロテスタントの思想は、世俗内禁欲として都市生活者に浸透し、近代資本主義社会の形成に寄与した。ディケンズの作品では、禁欲は神の愛を示すイエスの贖罪に似た自己犠牲となる一方で、克己という形で利潤獲得や資本蓄積に向けられた時は、セルフメイド・マンの利己主義や罪悪感に苛まれた人物の自己否定という形で現れる。前者は社会や他者から疎外され、後者は自分自身を疎外することになるが、両者とも孤立や不安から自己欺瞞に陥っている点は興味深い。時代的、気質的、作風的に漱石に近いギッシングの作品にも、近代都市生活者の自己否定、自己疎外、自己欺瞞の事例が多く見られるが、それらを引き起こす原因はディケンズの場合とかなり違っている。その違いは禁欲による現世での人間の向上心を無意味と考えた自然主義だけの問題であろうか。本発表では同じ問題を扱った両作家の違いとその意味について考えたい。

講師：明治大学教授 小宮 彩加

「貧民街を舞台とした初期作品におけるロンドンの比較」

ディケンズがチャタムからロンドンに出てきたのは1822年。少年ディケンズはロンドンをくまなく歩いて見物し、後にこの街を舞台に数々の小説を書くようになる。それから半世紀後の1877年。ヨークシャーから出てきたばかりのギッシングが見たロンドンは、まさに彼が愛読するディケンズの世界だった。

... four and twenty years ago, when I had no London memories of my own, they were simply the scenes of Dickens's novels, ... (Gissing, *The Immortal Dickens*)

ギッシングはその後ロンドンに暮らし、ディケンズと同じように町中を観察し、ここを舞台に小説を書くようになる。同じ貧民街を舞台にした二人の初期作品を中心に、作品に描かれるロンドンを比較・考察したい。

講師：同志社大学教授 玉井史絵

「小説家の使命——〈共感〉の表象をめぐる」

米国の哲学者 Martha C. Nussbaum は、様々な著作のなかで文学の教育における意義を論じる際、とりわけ小説が読者に喚起する *sympathetic imagination* の重要性を強調している。だが、この小説＝共感の喚起とは果たして自明のことであろうか。Audrey Jaffe はヴィクトリア朝文学において〈共感〉は階級間対立を個人的・感情的レベルで解消し、〈国家〉といったより大きな共同体を想像／創造する装置として機能したと論じている。社会改革者としての小説家の使命を強く意識していた Dickens と Gissing は、それぞれのやり方で登場人物間の共感を描き、また、読者の共感を喚起しようと模索したが、その共感の表象には時代とともに変化する社会や作家の特性を反映した差異が見られる。本発表では、Dickens と Gissing の初期作品、特に *The Old Curiosity Shop* (1840-41) と *Workers in the Dawn* (1880) を中心に、〈共感〉の表象をめぐるポリティックスを検討し、Dickens と Gissing の接点と分岐点を考察したい。

講師：立命館大学教授 金山亮太

「教育は誰のためのものか」

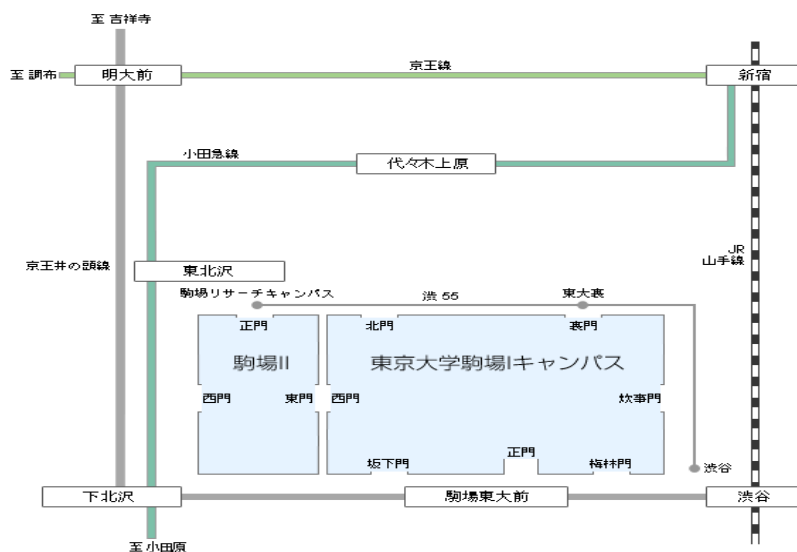
『ディケンズ論』の中でギッシングは、ディケンズの教養の欠如が作品の欠陥に繋がることや、19世紀前半は古典教育の社会的重要性が後半よりも高かったことを指摘する。ディケンズは劣悪な寄宿学校や詰込み教育や古典学者を攻撃するものの、彼自身は民衆が暴徒化するのを防ぐためにも万人に向けた包括的な教養教育の必要性を感じており、学校という制度をある程度は信用していた。ギッシングが活躍し始めたのは1870年の「小学校教育法」成立以降であり、いわば教育が万人に保証された時代であった。しかし彼はディケンズがあと50年遅く生まれていたらこの制度の恩恵を受けられたのに、と惜しんでいるのではない。むしろ、中途半端な教養を身につけて勘違いしている庶民に対する憎悪を彼は隠さない。下層中流階級を描写の対象としながら、教育というものに対する態度の異なる2人を比較し、その背後にあるものを考えてみたい。

講師：西南学院大学教授 三宅敦子

「文学的表象にみる19世紀イギリスの芸術運動の変容」

ヴィクトリア朝の幕が開いたころ、自国をヨーロッパの芸術後進国と認識していたイギリスでは、デザイン改革運動が始まった。1851年開催のロンドン万博は、その運動の一環であった。芸術と産業、芸術と道徳を結び付け、国民の趣味を改良しようとするデザイン改革運動は、19世紀末には、芸術を芸術として成立させようとする唯美主義運動と、手工業の復興から芸術と社会の関係を問うアーツ&クラフツ運動、そして消費活動を意識した中流階級向けのインテリア指南書や記事の出版ブームへと発展する。本発表では、主にディケンズの *Bleak House* (1852-53) と *Hard Times* (1854)、ギッシングの *The Odd Women* (1893) と *In the Year of Jubilee* (1894) を取り上げ、19世紀のイギリスにおける芸術運動の変遷が、両作家の文学的表象の変容と、どのように繋がっているのか論じたい。

アクセスマップ



【東京駅からのアクセス】

- ・JR 山手線（品川・新宿方面）乗車、渋谷駅より京王井の頭線（吉祥寺方面行）に乗り換え、駒場東大前駅下車、徒歩約1分

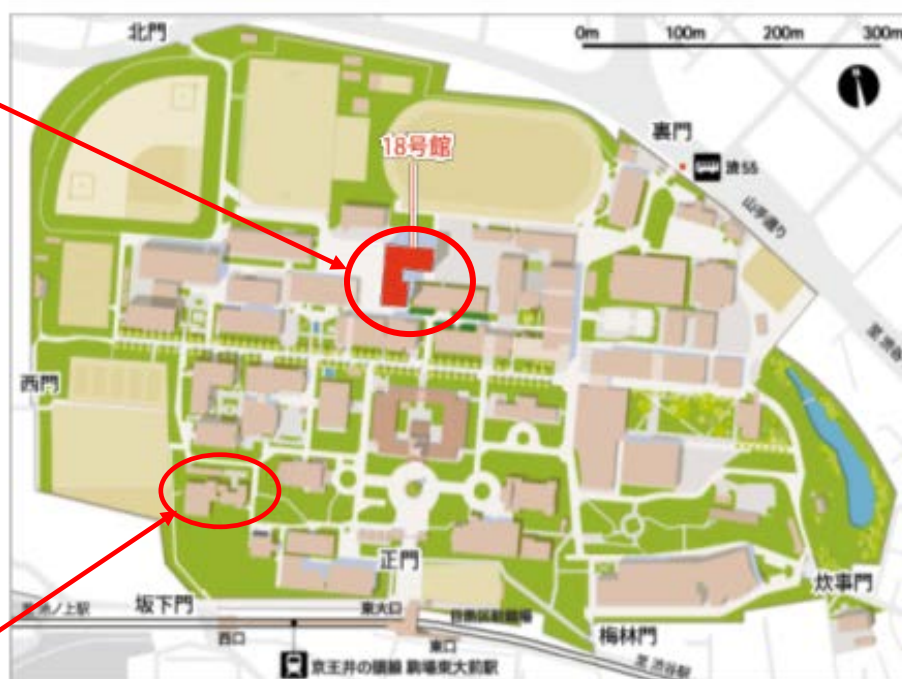
【住所】〒153-8902

東京都目黒区駒場 3-8-1

TEL: 03-5454-6014（総合文化研究科・教養学部）

キャンパスマップ

大会会場



懇親会会場

駒場ファカルティハウス 1階

「ルヴェゾンヴェール駒場」